

東京大空襲を体験して

長久手市岩作東島 倉地ふみ子さん

私は、昭和18年に夫と結婚して東京に上京し、杉並区方南町で戸建てを借りて暮らしていました。翌年には長男を授かりました。

夫は、赤紙と呼ばれる召集令状で軍隊に招集されました。入隊は地元の部隊になるので、勤務地であった東京からいったん出身地の長久手に戻ってきました。ところが、部隊の訓練中にお腹の病気に罹り、陸軍の野戦病院に3か月ほど入院していました。その間に所属部隊は戦地に行き、その部隊の戦友は、皆亡くなりました。偶然、病気になったことで夫は、命拾いをしたのです。回復後は、他の部隊に所属することもなく、昭和19年に再び夫の勤務地である東京へ家族で戻ることになりました。

東京での生活は、アメリカ軍による空襲におびえる日々でした。当時は、食べ物も不足していて、家族に対して3日に1本、ねぶか（ねぎ）の配給があるだけでした。時々、電車で10分ほど乗って新宿まで行き、ひば（大根の根を乾燥させたもの）を行列に並んで買い求めたものでした。

特に恐ろしかった焼夷弾による空襲は、夜間に一年をとおして行われました。夜、警戒のためにラジオのスイッチを入れっぱなしにしておく、「ブー、ブー」と鳴り、その後、「空襲警報発令・・・」と放送が続いたものでした。

一個の焼夷弾は、落下途中でいくつもの六角形の筒に分裂し、その筒が地面に触れると破裂発火しました。中でも油脂焼夷弾は、破裂すると油が飛び散り、手に触れるとなかなか火を消すことができませんでした。

このような状況では、夜はいつでも逃げられるように「もんぺ」を着用していました。私は、小さな子どもを抱えており、とても安気に眠ることができませんでした。夜になると警防団が街をまわり、家の明かりを消灯するよう呼びかけていました。空襲時の避難場所は決まっておらず、警防団があっちへ行け、こっちへ行けと指示するものでした。私たち家族も空襲警報が出され、避難する度に離ればなれになり、夜が明けると互いを探すのに必死でした。

昭和20年3月10日の東京は、アメリカ軍に大変な空襲を受けました。まず、アメリカ軍は照明弾を落として目標を確認し、かつてないほどの焼夷弾を

落としていったのです。それは、防空壕に収納してあった財産を取りに行く暇もないほどで、子どもを背負い、おしめをトランク2つに詰め、爆弾の雨の中を死ぬ思いで逃げまどいました。

この大空襲で家は焼け落ち、手元に残ったものは防空壕に収納しておいたものだけでした。空襲で焼け出され、私たちは東京から長久手に戻るしかありませんでした。当時は、東京から名古屋まで汽車で8時間かかりました。また、バスも東山（名古屋市千種区）までしか運行しておらず、そこからは徒歩で長久手まで移動した記憶があります。

その後、日本は終戦を迎えました。当時、テレビは普及しておらず、ラジオから流れてきた昭和天皇の玉音放送は今でも忘れることができません。この放送を聞いて、私は、日本が戦争に負けたのだと思いました。そう思うと涙が止まりませんでした。私だけではなく、皆も泣いていました。

戦争中は、人々の生活に必要な食料、衣服、燃料等を自由に手に入れることができないばかりか、死ぬか分からない不安に押しつぶされそうな日々を過ごすなければなりません。いいことは何一つありません。二度と起こしてはならないのです。